

地域の文化遺産を守るために

Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」をとおして



<https://www.notredame-shurijo.com/>

資料協力・助言:九州大学法学研究院主幹教授
ICOMOS(国際記念物遺跡会議)名誉会長 河野 俊行

制作:福岡県立図書館 青木 三保



福岡県立図書館デジタルライブラリ「宗像神社大島村 沖津宮遷擇所(写)」

<https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/iiif/mp030400-100030/341/uv#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-2225%2C-4%2C9158%2C4238>

先生方へ ①

昨年、2022年は、ユネスコの「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（略称：世界遺産条約）」（以下、世界遺産条約）の採択から50年、日本が世界遺産条約を批准して30年の年でした。

世界遺産ではなくとも、全国どの地域にも貴重な文化遺産は存在します。**地域の文化遺産（文化財）について正しい知識を得ること、さらにそれらの保全保護に係る意識の醸成を、本教材の目標にしたいと考えます。**

今回は、世界文化遺産登録に係るユネスコの諮問機関 ICOMOS（国際記念物遺跡会議）名誉会長（前会長）の 河野俊行 九州大学法学研究院主幹教授が総監修されたWeb展覧会をとおして、上記の二項を学べるよう教材を制作しました。

本教材は、前半が文化遺産全般及び上記展覧会に係る学習、後半が地域の文化遺産についての考察になります。殊に前半は文字が多く難しいと感じるかもしれませんが、文化遺産が地域に果たす役割を理解した上で、各々の地域について考えていただければと思います。

広くご活用いただければ幸いです。

そもそも「文化遺産」とは・・・？



文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産です。このため国は、文化財保護法に基づき重要なものを国宝、重要文化財、史跡、名勝、天然記念物等として指定、選定、登録し、現状変更や輸出などについて一定の制限を課す一方、保存修理や防災施設の設置、史跡等の公有化等に対し補助を行うことにより、文化財の保存を図っています。

(文化庁ホームページ>政策について>文化財(抜粋) <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/>)

文化遺産は、その国や地域またはコミュニティの歴史・伝統・文化を集約した象徴的な存在であり、そこに属する人々にとって何ものにも代え難い誇りであると同時に、世界の多くの国の人々をも感動させる価値を持っています。

世界各地では、戦乱や自然災害、貧困などの原因により、貴重な有形、無形の文化遺産が危機にさらされている例が少なくありません。このような文化遺産を、人類共通の貴重な遺産として国際的に手を携えて次世代へ伝えていくことは、お互いの文化を認め、尊重する姿勢にもつながり、安定した国際社会の基礎を成すものといえます。そこで、外務省でも外交政策の一つの柱として、文化遺産国際協力に力を注いでいます。

(外務省ホームページ>外交政策>広報文化外交>国際機関を通じた協力>文化遺産

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/kyoryoku/unesco/isan/index.html>)

◎ユネスコの文化等の分野における我が国の主な協力

【文化分野】

我が国では、文化多様性の国及び国際レベルにおける政策への組み込み、文化及び自然遺産の保存を通じた世界の文化多様性保護に対する貢献、創造及び開発を通じた文化多様性の保護などに貢献するため、関連の会議への参加をはじめとした協力を行っています。

1.世界遺産（World Heritage）

世界遺産条約（「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」）

我が国は、昭和47年（1972年）の第17回ユネスコ総会で採択された世界遺産条約（「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」）を平成4年（1992年）に批准し、人類共通の財産である世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保存のための国際協力・援助を推進しています。

また、我が国は現在、ユネスコの世界遺産を指定する機関である「世界遺産委員会」の委員国として、関係の会議等に参加、協力しています。

（文部科学省ホームページ>[国際関係](#)>日本ユネスコ国内委員会>ユネスコの活動>ユネスコの文化等の分野における我が国の主な協力 <https://www.mext.go.jp/unesco/006/003.html>）

⇒文化遺産（文化財）はそれ自体が貴重なだけでなく、
地域（国）の政策や対外的な関係にも影響を与える。

【再掲】

文化遺産（文化財）はそれ自体が貴重なだけでなく、**地域（国）の政策や対外的な関係**にも影響を与える。

⇒ **地域（国、民族）のアイデンティティとの密接な関係**

例：ウクライナの文化遺産

1. 「ウクライナの文化財を守れ！ロシアの破壊行為、市民が証拠集め」

日本経済新聞(令和5年1月28日閲覧)

<https://www.nikkei.com/telling/DGXZTS00001600W2A600C2000000/>

2. 「黒海の真珠」オデッサ、世界遺産に 脅威直面で緊急決定—ユネスコ」

Jiji.COM 令和5年1月26日掲載(令和5年1月28日閲覧)

<https://www.jiji.com/jc/article?k=2023012600025&g=ukr>



☆TOPIC☆

福岡県立図書館所蔵 参考資料①
『希望の一滴』中村 哲／著
資料ID: 1110051343



アフガニスタンで長く人道支援をされた 中村 哲氏は、
2001年のバーミヤンの大仏破壊についてこんな言葉を残しています。

「今世界中で仏跡問題が盛んに取りざたされているが、PMSは非難の合唱に加わらない。… 人類の文化とは何か。人類の文明とは何か。考える機会を与えてくれた神に感謝する。真の『人類共通の文化遺産』とは、平和・相互扶助の精神でなくてなんであろう。それは、我々の心の中に築かれ、子々孫々伝えられるべきものである。」

その数日後、バーミヤンで半身をとどめた大仏を見たとき、何故かいたわしい姿がひとつの啓示を与えるようであった。「本当は誰が私を壊すのか」。その巖の沈黙は、よし無数の岩石塊となり果てても、全ての人間の愚かさを一身に背負って逝き、万人に宿る仏性を呼び起こそうとする意志である。それが神々しく思えた。騒々しい人の世に超然と、確かな何ものかを指し示しているようでもあった。

学士会アーカイブズ No.832(平成13年7月)

「伝わらざるアフガニスタン—バーミヤン石仏破壊に思う—」中村 哲／著より引用 (令和5年1月27日閲覧)

https://www.gakushikai.or.jp/magazine/archives/archives_832_2.html

「文化遺産(の修復)」vs. 「他の社会的課題(生命、災害、貧困等)」

「どちらが大切か」ではなく 「文化遺産の復元が持つ力」という視点

「文化遺産の修復や再建は、人々の心の傷を癒し、地域社会を再建する一つの柱となるのです。」

「文化遺産の再建に資金や資源を投入する利用について、社会の理解を得る必要があります。専門家がしっかり携わって文化遺産の保護に忠実な方法で復元が行われることで、地域社会に力を与える。そのプロセスに地域住民にも議論に加わっていただき、再建の過程を一緒に歩んでほしいのです。」

(河野俊行 九州大学法科大学院主幹教授)

「火災から見た文化遺産の真実性: パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」(九州大学)

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/topics/view/1853>

例：熊本城(熊本県熊本市)

「復興のシンボル天守閣が遂に完成！ 歴史とテクノロジーの融合する空間を体感しよう」

「熊本県公式観光サイト もっと、も一つと、くまもつと。」(令和5年1月28日閲覧)
<https://kumamoto.guide/look/detail/231>



「熊本地震からの復旧・復興に向けて」

「寄付者の声:熊本の一日も早い復興を祈ります。特に熊本城の復興は県民の皆様のみならず、全国民の願いだと思います。」

「総務省 ふるさと納税 ケーススタディ60」(令和5年1月28日閲覧)
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_zeisei/czaisei/czaisei_seido/furusato/case_study/pdf/60.pdf

「熊本城 復興城主」(令和5年1月28日閲覧)
<https://castle.kumamoto-guide.jp/fukkou/>

熊本城の復興⇒熊本地震からの街の復興の象徴

先生方へ ②

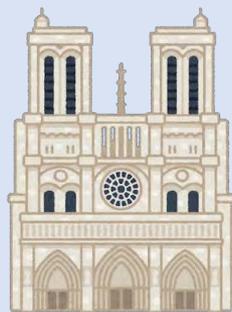
地域の文化遺産の被災・破壊が、地域や国、そこに住む人々（民族）の精神（アイデンティティ）を大きく傷つけること、被災し破壊された文化遺産の復興が地域や国、人々に力を与えることを、ウクライナや熊本城を例に述べました。

殊に、アフガニスタンで人命を第一に活動されていた中村哲氏が、破壊されたバーミヤンの大仏を見て書かれた「確かな何ものかを指し示している」との言葉は、文化遺産の持つ目に見えぬ力を端的に表しているようにも思えます。

次頁から、いよいよ「Web展覧会 パリ・ノートルダム大聖堂と首里城 2019年の火災を超えて」を、ノートルダム大聖堂を中心に見ていきます。画像の文字が小さく、また興味あるリンク先を確認するのも楽しいので、一人一人がWeb展覧会のホームページを開いて、ある程度自由に閲覧しながら、展覧会の内容を把握・理解していただきたいです。

パリ・ノートルダム大聖堂と首里城 2019年の火災を超えて 復元と文化遺産としての価値を考える

プロローグ



「復元は、建物の**文化遺産としての価値**、さらに**その社会的な価値**に関して、どのような意味をもつのだろうか。」

<https://www.notredame-shurijo.com/>

概要

パリ・ノートルダム大聖堂とは、
どんな存在なのか？



黄色い文字の項目をクリックすると、写真と解説の
ウィンドウが開きます。最初は興味のある言葉から、
ひとつひとつ開いてみましょう。

<https://www.notredame-shurijo.com/>

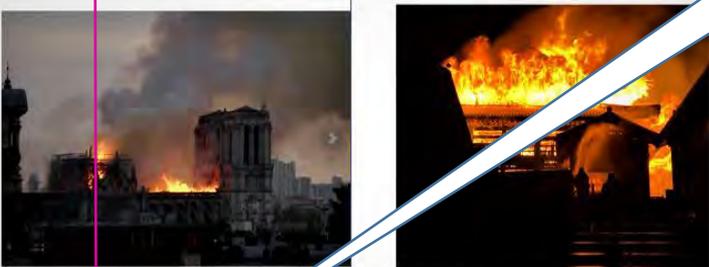
被災

灰燼

写真の下の●印をクリックすると
他の写真を見ることができます。

Room 1
灰燼

2019年一歴史的・文化的に重要な二つの建造物が火に包まれた。
救助活動も空しく、復旧不能な損失も発生し、文化的な価値は大打撃を被った。



火災は、2019年4月15日の18時18分に発生。消防隊の懸命な努力にもかかわらず、炎は蔓延した。同日22時30分に火勢は鎮圧されたが、大きな被害が残された。

- 火災発生から鎮火まで
- 莫大な被害と緊急措置
- 火災直後の動き

火災は、2019年10月31日未明に発生。夜明け前、首里城正殿は一瞬で焼け落ちた。

- 火災発生から鎮火まで
- 焼け落ちた首里城
- 火災後の動き



18時18分
同日22時30分

© Emmanuel Foumier

火災発生から鎮火まで

- 18:18 最初の警報、警備員による点検
- 18:45 二度目の警報、消防に通報
- 19:00 消防隊到着
- 19:30 内陣の屋根が焼失
- 20:00 尖塔が崩落
- 21:00 北塔の鐘楼に火勢が及ぶ
- 22:30 鎮圧
- 2:00 鎮火

被災の記録と記憶

<https://www.notredame-shurijo.com>

歴史①

不変性と変容

Room 2
不変性と変容

破壊と苦難は今が初めてではない
しかしいつの時代にも、この素晴らしい建造物を回復したいという、人々の強い願いがあった
こうした幾度もの修復や再建が、建造物に重層的な文化的価値を与え、
それが今日まで伝えられてきた



ジョン・フック画 13世紀半ば © Benjamin Mouton

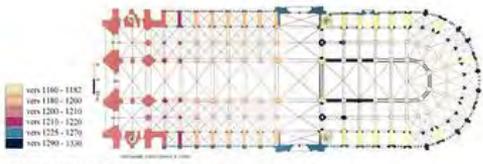
中世から19世紀：建造と改変

1160年、パリ・ノートルダム大聖堂は、革新的な技術を示す石造、すなわちゴシック建築（完成された建築技術と構造システムの結晶体）として建造が始まった。しかし17世紀以降、それは大きく改変され、さらに革命によって荒廃していった。

- 中世の大聖堂の建造
- いつまでも続く改築、増築
- 中世大聖堂の補修と用途
- 変容する大聖堂



建築地図 北西角付近 19世紀
© 不滅の文化遺産研究所 CC BY 4.0 (一部改変)



建築年代の色分け図 © Benjamin Mouton, author B. Loisel

中世の大聖堂の建造

大聖堂の建造には、約80年の歳月がかけられた。工事は、東側の内陣からはじまり、西の正面側へと、中断することなく進められた。内陣の礎石が築かれたのが1163年、献堂は1182年である。その頃には、袖廊と身廊の建造は既に始まっていて、これらは1220年頃に完成している。正面部分の建設は13世紀に入ったばかりの頃から開始され、1245年に完成した。この時、正面の双塔のうち北の鐘塔で、新しい鐘が打ち鳴らされた。

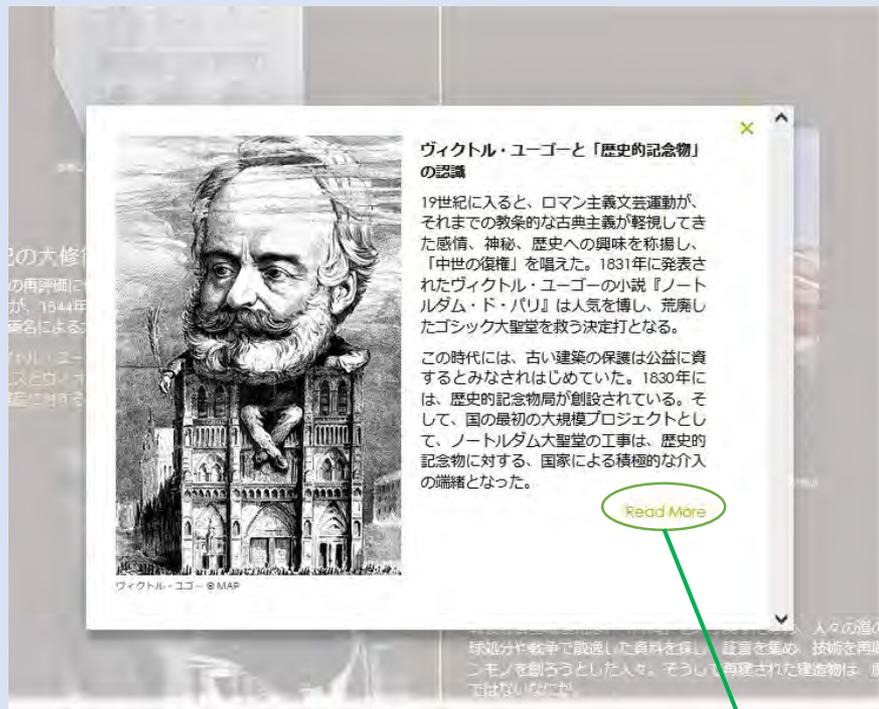
Read More

長い歴史の中で、「変わる(変わった)もの」と「変わらない(変わらなかった)もの」がある。
⇒ どちらもその文化遺産を形成する要素

<https://www.notredame-shurijo.com/>

歴史②

不変性と変容



ヴィクトル・ユーゴーと「歴史的記念物」の認識

19世紀に入ると、ロマン主義文芸運動が、それまでの教条的な古典主義が軽視してきた感情、神秘、歴史への興味を称揚し、「中世の復権」を唱えた。1831年に発表されたヴィクトル・ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』は人気を博し、荒廃したゴシック大聖堂を救う決定打となる。

この時代には、古い建築の保護は公益に資するとみなされはじめていた。1830年には、歴史的記念物局が創設されている。そして、国の最初の大規模プロジェクトとして、ノートルダム大聖堂の工事は、歴史的記念物に対する、国家による積極的な介入の端緒となった。

[Read More](#)

<https://www.notredame-shurijo.com/>



19世紀の大修復

中世建築の再評価に促され、大聖堂は大規模に修復されることとなった。それが、1844年から1864年にかけてエリク・ヴィオレ・ラデュックが手がけた大修復である。

- ヴィクトル・ユーゴー「歴史的記念物」の認識
- エリク・ヴィオレ・ラデュックの修復
- 文化遺産に対する今日の意識

復元

戦後の建築状況は、「復興」を掲げたものの、人々の関心や、戦後の半壊状態で戦後復興を促し、資金を集め、復元を再興して再生させるという人々、そして復元のための活動が、復元ではなかった。

- 復元の歴史
- 復元のための活動
- 「復興の歴史」への取り組み

戦火を逃れた資料が、復元のための詳細な情報をもたらした

- 戦火を逃れた資料
- そして、復元のための活動

項目を開き歴史を知ると、私たちが見ている**現在の文化遺産は、長い歴史の中変遷した結果の姿**であることがわかります。それでは、**復元とは何なのか？どの時点が本来のその姿なのか？**考えてみましょう。

Click！より詳細な内容が読めます。

歴史③

文化遺産の実践と理論の発展

<https://www.notredame-shurijo.com/>



2019年4月18日付 Le monde 紙に掲載されたプランテによるイラスト。

© Plantu, by courtesy of the author

文化遺産の実践と理論の発展

- 1972年 世界遺産条約
- 1978年 世界遺産条約
- 1985年 世界遺産条約
- 1992年 世界遺産条約
- 1994年 世界遺産条約
- 1998年 世界遺産条約
- 2003年 世界遺産条約
- 2005年 世界遺産条約
- 2008年 世界遺産条約
- 2011年 世界遺産条約
- 2015年 世界遺産条約
- 2017年 世界遺産条約
- 2019年 世界遺産条約



1972年:「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(略称:世界遺産条約)」採択
日本が世界遺産条約を批准したのはその20年後です。
黄色の囲い部分をひととおり読んでおくとよいでしょう。

想いと記憶①

www.notredame-shurijo.com

想いと記憶

そして今回の悲劇、この喪失は、人々の心にとろけたのが、人々の強い思い、興すべき記憶。



想いがつまった大聖堂

大聖堂火災のニュースは人々に衝撃を与え、悲しみと支那のメッセージが世界中から寄せられた。その一方、政治的緊張がもたらしたフランスでは、災難は国民を統合するのではなく、むしろ社会的な分断と論争を引き起こすことになった。

- 国境を越える思い
- 生きている大聖堂と記憶
- 国家の危機、社会的危機、そして政治的危機



思いがけない喪失感

喪失の前夜、想像と記憶の間にかこころの隅りとどこかにあったこと、思い出、という多くの声。

- 心の底
- 世界のフナーチエの思い
- 記憶のかけら



遺産の危機、社会的危機、そして政治的危機

文化遺産の被災が往々にしてそうであるように、ノートルダム大聖堂の火災も危機の幕開けとなった。それは政治的・社会的に緊迫した状況で起こり、それをさらに深刻なものとした。まさにあの日の夕方、大統領は「黄色いベスト運動」に対応するための数か月にわたった国民大討論会を終了すると発表し、火災と大聖堂の再建は、政治的議論の渦中に巻き込まれることとなった。被災後の大聖堂に寄せられた莫大な大口寄付金はまた、社会問題や人道問題に対する無関心と等置された。大聖堂の火災は、資本主義社会において何を優先すべきか、という倫理的な問いを突き付けたのである。

Read More

ノートルダム大聖堂の火災は、国境を越えた悲しみの共有をもたらした一方で、フランスにとっては、政治的・社会的に緊迫した当時の状況をより厳しくするものとなった。

大聖堂の再建に係る世界中の関心は、他の社会問題や人道問題に対する無関心と相対した。この社会において優先すべきは何なのかが、火災によって浮き彫りになったとも言える。

「文化遺産(の修復)」vs.「他の社会的課題(生命、災害、貧困等)」
(※スライド7を参照)

思いと記憶②

<https://www.notredame-shurijo.com>

【被災した破片】

聖遺物 ⇒ 「聖遺物のようなもの」

⇒ 十火災の記憶 ⇒ 十人の手による

復元(挑戦)の記憶

⇒ 火災を乗り越える記憶



写真は、火災の翌日にロイター通信のフィリップ・ウォジャザー氏が撮影したもの。ソーシャルネットワーク上で多くのコメントが寄せられた。カトリック教徒によっては奇跡のように見えるが、他の人々にとっては、建築物とその作製の歴史を示す精華はサインのようにも見える。© Reuters/ Philippe Wojazer/ Pool.

救出と奇跡の叙事詩

火災の夜、人々は鎖のように連なって大聖堂から宝物や聖遺物を運び出した。移動できるものはすべて、近くのパリ市庁舎に避難させた。翌日、崩落したヴォールトや焼け焦げた屋根などががれきの中から、1994年にマルク・クチュリエが制作した黄金の十字架や、ノートルダムを守護する14世紀の聖母像が奇跡的に見つかった。その様子は世界中に伝えられ、宗教の垣根を越えて、人々は目の前で起こった出来事の稀有さに心を揺さぶられた。



© Archives de la Culture / Samira Taniot

がれき、遺物、それとも聖遺物

火災は、ほぼノートルダム大聖堂の歴史の一部であり、その壮大で記念碑的な物語に組み込まれた。しかし、その痕跡をどう扱えば良いのだから？ 火災後の破片の扱い、がれき、遺物、あるいは聖遺物のいずれとするのかによって、大聖堂をめぐる「記憶」の作り方は異なってくる。

- 救出と奇跡の叙事詩
- 考古遺物に変わるがれき
- 記憶のつくりかた



© Archives de la Culture / Samira Taniot

沖縄とはなにか

そして、悲しみの先に湧き起こったのは、深い、文化遺産に人々が影響する価値や国文化遺産の再建は、相互理解のプロセスと

- 大聖堂はどっちを向くの？
- 第22回国会総会が語ること
- 人々が主教の文化遺産



考古学者 Béatrice Bouet (DRAC IDF/IRA) が書いた、遺跡の記憶を呼び起こす絵。© Béatrice Bouet.

記憶のつくりかた

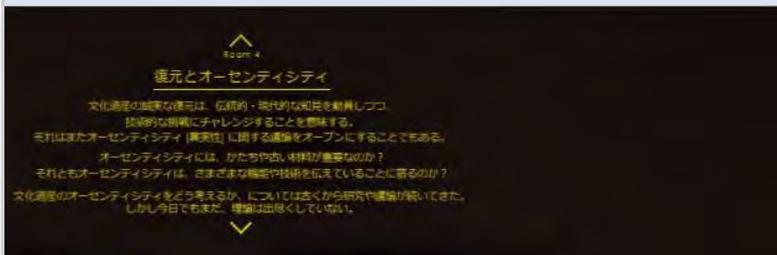
ノートルダム大聖堂を愛する者にとって、被災した破片は、そのステイタスや神聖性がいまいな、「聖遺物のような物」になる。宗教性も帯びているが、先祖伝来の遺産でもあるようなモノ。この破片に、大聖堂への愛着によって、火災の記憶が刻まれる。ベルリンの壁の破片が壁の崩壊を記念するように。しかしそんな感覚は、物質的な痕跡に執着しない聖職者にとっては異質なものだ。他方、修復現場では、一つ一つの作業によって、人の手による並外れた挑戦の記憶が作られていく。それは、想いに突き動かされた一人一人の、そして皆が協力して成し遂げる、火災を乗り越える記憶。

<Read More>

… 火災の日の夜、人々は自発的に救出にかけつた。… 消防士、大聖堂のスタッフ、警察官、遺産管理者が鎖のように連なって、茨の冠や他の宝物を救い、ルーヴル美術館の保管庫に運んだ。

復興に向けて①

復元とオーセンティシティ



2014年に実施された正確な調査
+
19~20世紀の資料と熟練職人の作った多くの模型

現代の精密な技術+伝統的な調査⇒**精緻な知見**
経験とノウハウ+科学的分析⇒**信頼できる技術と最新のツールを用いた工事**



オーセンティシティはひとつ？
今日オーセンティシティは文化遺産保護のキーワードである。しかしノートルダム大聖堂には、異なる時代の仕事が入り混じっている。中世に段階的に行われた建造、17世紀の改修、18世紀及びフランス革命期の修繕、19世紀の大規模な修復。そして現代の文化遺産保全活動。オーセンティシティのために、どの時点に焦点を当てるのか？物質的な側面のみを焦点を当てればいいのか？そして、「修復」「復旧」「修復」のどれを目標とすべきか？

さらなるホンモノを目標に
修復の形がわからなくても、元の形を再現する。オーセンティシティとは、これらから再構築される正統性、これらからの広さを理解し、新たな試みも必要である。

- 修復(中世)の礎と骨
- 中世のオーセンティシティ
- 修復と森林管理



オーセンティシティ(真実性)はひとつ？

復興に向けて②

復元とオーセンティシティ

<https://www.notredame-shurijo.com/>



感性がとらえた大聖堂

ノートルダム大聖堂の有形無形の文化遺産としての価値の評価は、何ら専門家だけに委ねられたものではない。何百万人もの来訪者にとって、大聖堂は、音、光、匂い、信仰、思い出で構成された、感覚的で個人的な体験だ。それが一人一人の心に特別な愛着を生み、またノートルダムの歴史に一人一人の軌跡を刻むのだ。復元される大聖堂は、彼らの思い出に忠実でなければならない。この忠実さの中にこそ、生きたオーセンティシティの一つの形がある。

ノートルダム大聖堂の評価は、専門家だけに委ねられたものではない。来訪者(それがたとえ画面越しでも)にとって、「大聖堂は、音、光、匂い、信仰、思い出で構成された、**感覚的で個人的な体験だ**。それが一人一人の心に特別な愛着を生み、またノートルダムの歴史に一人一人の軌跡を刻むのだ。**復元される大聖堂は、彼らの思い出に忠実でなければならない。この忠実さの中にこそ、生きたオーセンティシティの一つの形がある。**」



作業中の大聖堂シュブジェ © Alexis Kormendy, C2016

未来につながるノートルダム

さまざまな技術と知見を駆使して、焼失前のおりに再建することで、大聖堂は建築物としてのインテグリティ (完全性) を取り戻し、シテ島の中心的な存在として再生するだろう。同時に、大聖堂を訪れる人たちにとって、音の響きや光の効果など、感覚的なものも大切であり、それを再現することもまた重要である。

- 注目を集める、人々とノウハウ
- 形ないものの再現
- 感性がとらえた大聖堂
- 大聖堂をふたたび街の中心に



大聖堂をふたたび街の中心に

中世の大聖堂前広場は、広さが限られ、密集した都市空間に囲まれていて、その姿は**13世紀から18世紀まで、ほとんど変わらなかった**。しかし、1874年に広場は大きく拡張され、1.5ヘクタールもの不釣り合いに大きい空虚な空間になり、大聖堂を街の賑わいから孤立させてしまった。今回の火災は、思いがけず、周辺環境を見直す良い機会かもしれない。聖堂前広場に、もう一度生命を吹き込み、**にぎわいを取り戻せないだろうか**。破壊された街区の建物群を、現代の建築にマッチするように再現するのもいい。大聖堂とその保存について学べるセンターをつくるのでもいい。

[Read More](#)



ヌーヴ - ノートルダム通りからの眺め Edouard Gaertner 作 1826年

ノートルダム大聖堂と首里城正殿 ―新しい二つの事例

ノートルダム大聖堂と首里城正殿は、今回もその深い傷を乗り越え、完全性を取り戻すために動き出している。それを後押しするのは、調査研究から得られる最高レベルの知見と洞察、職人・技術者・研究者の卓越した努力、そして市民の意思と支援である。

失われた部分を誠実に復元することは、これまでしばしば揶揄されてきたような、文化遺産の改竄ではない。それは、オーセンティシティの核心に関わる部分を正確に回復させる作業・プロセスである。

誠実な復元を認めることは、文化遺産保全における質的な進化なのだ。それを否定するならば、誠実に復元されたモニュメントさえも批判の対象となってしまう。しかしそれでは、誠実な復元によってオーセンティシティの核心部分を取り戻すことを願う世界中の人々の想いを裏切ることになるだろう。

そこで、ノートルダム大聖堂と首里城正殿の復元は、この理念上の進化に大いに貢献するだろう。それだけではない。文化遺産保全において、従来から重視されてきた材料や形態など形あるものの価値だけでなく、歴史や記憶など形のないものにも、大切な役割があることを気づかせてくれる契機となるだろう。

「文化遺産保全において、従来から重視されてきた材料や形態など形あるものの価値だけでなく、**歴史や記憶など形のないものにも大切な役割がある**」

先生方へ ③

ここまで、Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城 2019年の火災を超えて」を、ノートルダム大聖堂を中心に見てきました。

文化遺産の被災は取り返しのつかない悲劇で、(被災により明らかになる)現実には往々にして厳しいものですが、それでもなお復興へと進む人々の想い、そして文化遺産そのものが持つ力は、地域や国さらには世界を動かし、変えていく可能性があるのではないかと、感じさせてくれます。

①文化遺産(の復元・復興)が人々や地域、国にもたらす力、②被災した文化遺産を復元するための拠りどころ(文書や図面等の記録)、③文化遺産の復元・復興に技術や歴史、記憶等目に見えないものが果たす役割、この3点を、展覧会をとおして各々で考えていただければと思います。

次頁からは、福岡県に存在する世界文化遺産、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群を例にとり、考えていきます。県外の方は各々の地域の文化遺産について考察してみてください。

【ふくおか(福岡県)の文化遺産】

福岡県に存在する文化遺産の中で最も重要なもののひとつとして、「世界文化遺産」の下記2件が考えられる。

- ・ 明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業（三池炭鉱、官営八幡製鐵所ほか）：2015年登録
- ・ 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群：2017年登録

今回はこちらについて
考えてみましょう！



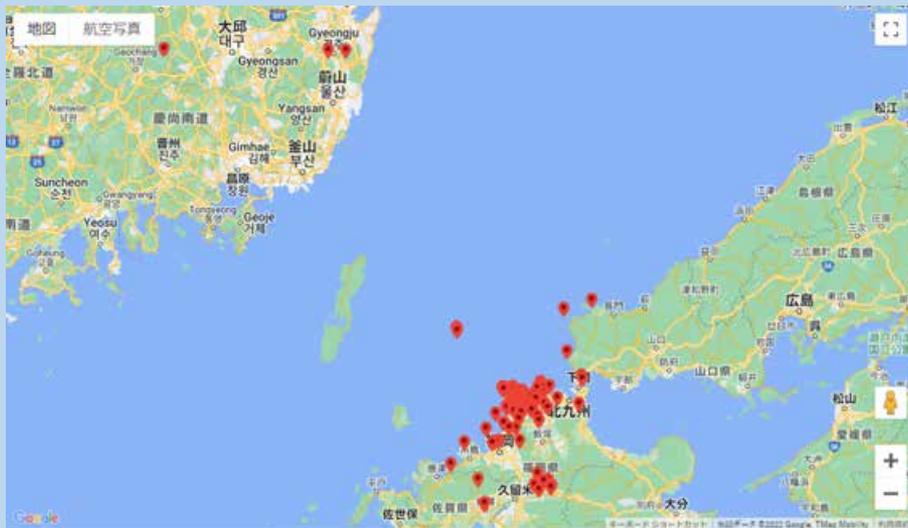
「三池炭鉱閘門」（絵葉書）
<https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/catalog/mp050900-100050>



「[筑前国十五郡三図]
三図の3(目録)」
<https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/catalog/mp030210-100030>

ふくおかに存在する文化遺産の危機についての考察 ①

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の地理的背景



※赤い印は国内外に点在する宗像神社・関連スポット

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群デジタル・アーカイブ

<https://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspx?langid=>



文化遺産オンライン「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

https://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlinkH

ふくおかに存在する文化遺産の危機についての考察 ②

「沖ノ島」について考えてみましょう。



博多湾と朝鮮半島を結ぶ線のおよそ中間に位置する沖ノ島。「沖ノ島には、日本列島、朝鮮半島および中国大陸の諸国間の活発な交流に伴い、4世紀後半から9世紀末まで続いた、航海安全に関わる古代祭祀遺跡が残されています。」(前スライド:世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群>「知る」より)

沖ノ島の文化財的価値を危機に晒すものとして
どんな被害が考えられるか。

- ① 天災(どのような?)
- ② 人災(誰からのどのような?) ほか…

ふくおかに存在する文化遺産の危機についての考察 ③

福岡県立図書館デジタルライブラリで見る「沖ノ島」

福岡県立図書館デジタルライブラリ「筑前国十五郡三図」 三図の3」

<https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/iif/mp030210->

[100030/30_sanzu003/uv#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-9338%2C-1%2C34120%2C12216](https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/iif/mp030210-100030/30_sanzu003/uv#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-9338%2C-1%2C34120%2C12216)



リンク先のデータを参照して、あるいはスライド23の写真と見比べて、沖ノ島内外の様子を考えてみましょう。



福岡県立図書館デジタルライブラリ「宗像神社大島村 沖津宮遥拝所(写)」

<https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/iif/mp030400->

[100030/341/uv#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-2225%2C-4%2C9158%2C4238](https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/iif/mp030400-100030/341/uv#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-2225%2C-4%2C9158%2C4238)

ふくおかに存在する文化遺産の危機についての考察 ④

他機関のホームページやデジタルアーカイブから「沖ノ島」を考える。

1.文化庁:[文化遺産オンライン](https://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlinkH)> 世界遺産と無形文化遺産>世界遺産>「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

https://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlinkH

※関連資料の「推薦書(日本語)」の中では、沖ノ島についても詳細に言及されています。

また、同「顕著な普遍的価値(OUV)の言明」を読むと、沖ノ島が対峙する可能性がある「危機」について手がかりがつかめるかもしれません。

2.「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会(事務局:福岡県庁内):[「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群](https://www.okinoshima-heritage.jp/)

<https://www.okinoshima-heritage.jp/>

※豊富な図版が掲載されたホームページです。立ち入りが禁忌とされている沖の島内の写真を見ると、その「危機」を身近に感じることができます。

3.「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会(事務局:福岡県庁内):[「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群](https://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspx?langid=)
[デジタルアーカイブ](https://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspx?langid=)

<https://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspx?langid=>

※2に加え、全国の宗像神社等関係する文化財を見たり、写真・音声等カテゴリ別にデータベースを検索することができます。

4.その他:[ジャパンサーチ](https://jpsearch.go.jp/) <https://jpsearch.go.jp/> 等

複数のデータにより対象への理解が深まると、「危機」への意識も拡がります。「危機」は受動的なものだけではないかもしれません。

ふくおかに存在する文化遺産の危機についての考察 ④-2

日本の分野横断型文献検索サイト「ジャパンサーチ」で「沖ノ島 宗像」を検索

⇒ 国立公文書館デジタルアーカイブがヒット

「宗像神社沖ノ島詰ノ者滞留日当」

(太政類典・第二編・明治四年～明治十年・第三百十五巻・理財三十五・旅費二)

明治初期、旅費に係る国の公文書です。画像だと8枚。読んでみましょう。



沖ノ島の「不変性と変容」について

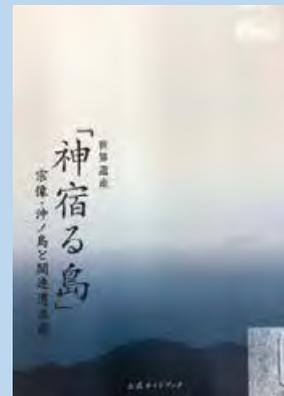
Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」に出てきた「不変性と変容」。
沖ノ島の「不変性と変容」について、考えてみましょう。



福岡県立図書館所蔵
参考資料②
『世界のなかの沖ノ島』
春成秀爾／編
資料ID:1109136873
※複数の研究者による
論文集。

これまでに紹介した関係機関
のホームページやデジタルア
ーカイブ、さらには図書館の
資料も調べてみましょう。

福岡県立図書館所蔵
参考資料③
『世界遺産「神宿る島」宗
像・沖ノ島と関連遺産群 資
料ID:1109515486
※自治体による公式ガイド
ブック。



福岡県立図書館所蔵 参考資料④
『神坐す(います)沖ノ島 海の正倉院』
藤原新也／著
資料ID:1109214017
※福岡県門司市(現北九州市)生まれの
写真家が撮った沖ノ島の姿。



福岡県立図書館所蔵 参考資料⑤
『神々への美宝』
宗像大社／企画・監修
資料ID:1109810859
※宗像大社神宝館が所蔵する世界遺産の
遺跡群から出土した国宝の数々を紹介。

沖ノ島の「想いと記憶」について

Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」に出てきた「想いと記憶」。
沖ノ島の「想いと記憶」について、考えてみましょう。

沖ノ島への「想い」
沖ノ島の「記憶」

誰のどんな想いなのか
どんな記憶なのか
例：信仰、畏敬、希望、恐怖 ...

※ 沖ノ島が被災したら、人々はどう感じるでしょうか。
古代から「聖なる孤島」として歴史を積み重ねてきた
沖ノ島。厳しく入島を制限された沖ノ島への人々の想い、
記憶とはどんなものだったのでしょうか。
そして、「人々」でなく自分自身はどうなのか。
考えてみましょう。

福岡県立図書館所蔵 参考資料⑥

『神の島 沖ノ島』

藤原新也／著、安部龍太郎／著

資料ID: 1108499490

※写真家 藤原新也による島内の写真・文に
直木賞作家 安部龍太郎がこの地を支配
した古代宗像一族の謎に迫る。



沖ノ島の「復元と真実性」について

Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」に出てきた「復元とオーセンティシティ」。沖ノ島の「復元とオーセンティシティ(真実性)」について、考えてみましょう。

文化遺産としての沖ノ島のオーセンティシティ(真実性)

「目に見える要素」「目に見えない要素」

沖ノ島に「復元」が必要となった場合

- ・どの(時代の)状態に戻すのか
例:〇〇時代、世界遺産登録時の状態 等
- ・何をもって「復元」と言えるのか
例:残された文書の記録を参照するのか
世界遺産登録時の公文書を参照するのか

そもそも、復元は必要なのか？ 可能なのか？

※ 入島が厳しく制限される沖ノ島の場合、復元のため多くの人が島を訪れることは、そのオーセンティシティを傷つけるのでしょうか。
現在の女人禁制は、緊急措置として解かれる可能性があるのでしょうか。
考えてみましょう。

☆TOPIC☆



2023年1月10日、福岡市に本社を置く西日本新聞に下記の記事が掲載されました。

「禁忌の島」でダイビング、釣りの来訪に歯止めなく 世界遺産の沖ノ島

「海の正倉院」と呼ばれ、漁民らが島自体を崇拝して厳しい禁忌で島を守ってきた一方、すぐそばの海域ではダイビングが急増している。島に隣接する岩礁では以前から、磯釣りも黙認。レジャー目的の来訪に歯止めをかけるルールはなく、関係者の間で困惑が広がっている。」(同記事より)

「沖ノ島(福岡県宗像市)周辺では数十年、磯釣りが黙認されてきた。ダイバー側は「なぜ磯釣りはいいのか」と疑問視し、宗像市も調査を続ける。レジャー目的での来島のあり方は、再検討が求められそうだ。」(同記事より)

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/1038355/>

★記事を読んで、書かれた行為についてどう考えるか整理しましょう。「沖ノ島」を中心に「何」と「何」が対立しているのか。道義的な面だけでなく、文化遺産の価値という視点から考えましょう。

先生方へ ④

地域の文化遺産として、福岡県の世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の中から、その最も象徴的な存在である「沖ノ島」を例にとり、Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」の流れに沿って考察していただけるよう、スライドを作成しました。

文化遺産が危機に晒された場合を仮定することで、その価値、オーセンティシティ(真実性)について、普段より深く突きつめて考えることができれば・・・と考えております。

古代から入島が制限され、スライド27に挙げた明治時代の公文書の中に「絶海ノ孤島」という表現があるほど、世間から隔たった存在であった沖ノ島。デジタルアーカイブや関係機関ホームページの掲載量も他の文化遺産に比すると少なめで、授業には使いづらいと感じられるかもしれません。

そんな時は、ぜひ図書館をご活用ください！福岡県立図書館では、スライドに挙げた参考資料をはじめ様々な資料をご紹介します。

県外の皆さまも地域の文化財・文化遺産を例に考え、図書館を活用していただければ嬉しいです。

おわりに

いかがでしたか？文化遺産の関連資料は、貴重な建築・美術などの宝庫です。Web展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城」からお気に入りの一枚を見つけて、さらに学びを深めるのも楽しいですね。



福岡県立図書館キャラクター
「ふっきょん」

ふっきょんの
お気に入りはこれ！



ユベール・ロベール作 18世紀

展覧会のどこに掲載
されていた？
作家は？どの時代の絵？
同じ作家の絵を日本で
見ることはできる？

福岡県立図書館所蔵 参考資料⑦
『絵画と表象 1 ガブリエル・デステ
レからユベール・ロベールへ』
大野芳村／著
資料ID: 1108274289

